



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伸びる資質・伸ばす教育：平成12年度北海道地区大学ガイダンスセミナー報告
Author(s)	鈴木，誠；小笠原，正明；西森，敏之 他
Citation	高等教育ジャーナル，9，126-135
Issue Date	2001
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.9.126
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29684
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P126-135.pdf



伸びる資質・伸ばす教育

- 平成 12 年度北海道地区大学ガイダンスセミナー報告 -

鈴木 誠^{1)*}, 小笠原 正明¹⁾, 西森 敏之¹⁾, 阿部 和厚¹⁾, 長木 謙司²⁾, 上田 徹³⁾,
田中 昌弥⁴⁾, 溜 雅幸⁵⁾, 土岐 均⁶⁾, 奥平 忠志⁷⁾, 細川 敏幸¹⁾

¹⁾北海道大学高等教育機能開発総合センター, ²⁾札幌北高等学校, ³⁾石狩南高等学校, ⁴⁾北海道教育大学,
⁵⁾札幌西高等学校, ⁶⁾札幌啓成高等学校, ⁷⁾札幌国際大学

Student's Ability to Develop by Oneself and Education to Help the Development - Report of Guidance Seminar in Hokkaido District in 2000 -

Makoto Suzuki,^{1)**} Masaaki Ogasawara,¹⁾ Toshiyuki Nishimori,¹⁾ Kazuhiro Abe,¹⁾
Kenji Nagaki,²⁾ Touru Ueda,³⁾ Yoshiya Tanaka,⁴⁾ Masayuki Tomari,⁵⁾ Hitoshi Toki,⁶⁾
Tadashi Okuddaira⁷⁾ and Toshiyuki Hosokawa¹⁾

¹⁾Center for Research and Development in Higher Education, ²⁾Hokkaido Sapporo Kita High School,
³⁾Ishikari Minami High School, ⁴⁾Hokkaido University of Education, ⁵⁾Hokkaido Sapporo Nishi High School,
⁶⁾Saporo Keisei High School, and ⁷⁾Sapporo National University

Abstract — On September 20, 2000, teachers of universities and high schools in Hokkaido met together at Hokkaido University in order to discuss various problems about their education, entrance examinations, and others. This seminar led to the following conclusions. (1) It is important for high school students and university students to develop ability to acquire basic attitudes for study and cooperation. (2) To develop such ability, it is helpful to give a student appropriate guidance according to his characteristics. (3) Some of university students in Japan are short of such kinds of literacy as should be acquired at the stage of the secondary education. (4) In universities, some measures (that is, quizzes, contests, 'Grade Point Average System' and placement tests) have been introduced to stimulate student's motivation for study. (5) High schools are suffering from two contradictory pressures, one from the government requesting to teach less and the other from universities requesting to teach more.

(Received on March 25, 2001)

*) 連絡先 : 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

はじめに

今まで実施されてきた大学入試は、各大学のアドミッションポリシーを基に、各教科における様々な認知領域の習熟度や達成度を、筆記試験で問うものがその主流であった。また、近年推薦入試やAO(アドミッションズ・オフィス)方式の入試が各大学に急速に導入され、認知領域以外の多様な資質や能力を受験生に求めるようになってきた。しかし、これら他に大学で学問を学び研究を進める上で、また社会の前線で活躍していく上で必要とされる能力や資質には様々なものがあることも事実である。例えば、近年指摘される学習意欲や日本語リテラシー能力、創造性や固執性、論理的思考力や問題解決能力といったキーワードはその一例である。では、高等学校や大学の教育現場では、今までこれらの資質を十分育ててきているのだろうか。

一方、これから始まる新学習指導要領では、学習時間数の減少とともに大幅な学習内容の削減が進められている。その実施によって、学力や学習意欲の低下の危険性が様々な機関から指摘されている。このよ

り困難な状況を前に、教育現場では伸びる資質とは何か、また伸ばす教育とはどのような教育か、その視点と方略を明確にする必要がある。しかし、これらの問題について、今まで高等学校と大学の間で議論がなされることはほとんどなかった。

これらの問題意識に立ち、本年度の大学ガイダンスセミナーは2つのシンポジウムを実施した。その内容を表1に示す。シンポジウム1では、どのような資質を持った学生が入学後伸びる可能性があるかについて、高等学校及び大学の教育現場でこの問題に取り組んでいる教員から具体的な報告を受けた。シンポジウム2では、シンポジウム1の内容を基に、入学後に伸びる資質をどのように育てるか、高等学校及び大学での実践事例を基に、学習指導の一つの方向性を探った。

それぞれのテーマは難しく、方向性のある議論には至らないことが十分予想された。しかし、このシンポジウムを行うことによって、今後、「伸びる資質」「伸ばす教育」についての議論の展開が期待できると考えた。本稿は、このシンポジウムの内容をまとめたものである。

表1. ガイダンスセミナープログラム

「伸びる資質」「伸ばす教育」				
シンポジウム1「高校で伸びる資質」「大学で伸びる資質」				
司会	北海道札幌北高等学校	長木	謙司	
	北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授	鈴木	誠	
報告	石狩南高等学校	上田	徹	
	北海道教育大学	田中	昌弥	
シンポジウム2「高校での教育」「大学での教育」				
司会	北海道札幌西高等学校	溜	雅幸	
	北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授	細川	敏幸	
報告	札幌啓成高等学校	土岐	均	
	札幌国際大学	奥平	忠志	

シンポジウム 1

「高校で伸びる資質」「大学で伸びる資質」

1.1 『高校で伸びる資質』

報告者 北海道石狩南高等学校
上田 徹

(1) 本校の概要

本校は石狩市の南端、札幌市に隣接する花川地区に位置し、創設18年目を迎える全日制普通科30学級の単置校である。生徒の7割以上は石狩市以外外(ほとんどが札幌市)からの通学している。90%以上の生徒が進学希望で、札幌圏を中心とした道内大学・短大が進学先の中核をなしている。なお入学者の学力層は、入選平均点が7割前後、内申ランクの中心はF段階である。進路先や成績については、資料1から3を参照されたい。

- ・学級編成...1学年10学級(文系6・理系2・文理系2)
- ・教育課程上の特色...65分授業の実施(1日5時間土曜日のみ2時間)

(2) 様変わりする進路環境

私大・短大を中心とした入試環境の変化や、推薦入試定員枠の拡大、また選抜方法の多様化・複線化や拡大する総合問題や小論文試験など、進学指導も「昨年と同様に...」では成り立たなくなっている。一方、入学してくる生徒の気質が、年々変化してきているとの声も多く聞かれている。

(3) 卒業生の入学時の成績と高校での成績、および進

路先との関係について

入選点や中学校時代の内申点と、入学後の成績との相関は高くない。いかに高校生活を過ごすことができたかが重要であり、高校での成績と出口との関係には一定以上の相関が認められる。

(4) どのような資質を持った生徒が入学後に伸びているか

1. 基本的な生活のリズムが確立しており、社会ルールを身につけている生徒
2. 早期に、家庭での学習習慣を確立できている生徒
3. 素直に助言を受け入れられる謙虚さを持っており、粘り強く様々な活動に取り組める生徒

本校での高校生活を通じて伸びる生徒の共通点をあげると、一般的に「指導上の重点」と位置づける事項を伸びる素地・要素としてあげることができる。前述のような生活や学習の基盤づくりのできた生徒らが、さらに

自ら行動することや考えることを苦にしない
自分に無関係ととらえられがちな社会問題を、自分の問題として考えることができる
人間関係を取り結び、他と協力しあって一つのものを作り上げられる
社会との関係の中で、自分の進路観を育てていく過程を大切にできる(どう生きたいか・職業観・学部学科の選択・志望先の選択=『自己理解』の手続きをふめる)

などの資質を獲得し、「こうありたい自分」と「現状の自分」との落差を認識し、目標達成のための努力や取り組みができた時に、飛躍的に伸びている。

資料1. 進路先の状況(平成9年及び12年3月卒業生)

	大学		短大		専修各種学校		就職		その他	卒業数
	国公立	私立	国公立	私立	医・看護	その他	民間	公務員		
平成9年	24 5%	145 33%	4 1%	79 18%	16 4%	73 17%	16 4%	7 2%	77 17%	441
平成12年	34 9%	177 47%	1	44 12%	34 9%	47 12%	3 1%	2	38 10%	380

資料 2. 平成 12 年 3 月卒業生入試時の成績と進路先

	大学		短大		専修各種学校		就職		その他	卒業数
	国公立	私立	国公立	私立	医・看	その他	民間	公務員		
上位 25%	14 41%	38 22%		11 25%	11 32%	10 21%	1	1	9 24%	95
～ 50%	7 21%	45 25%		11 25%	8 24%	12 26%	1	1	10 26%	95
～ 75%	10 29%	44 25%		11 25%	8 24%	10 21%			12 32%	95
下位 25%	3 9%	50 28%	1	11 25%	7 21%	15 32%	1		7 18%	95

資料 3. 平成 12 年 3 月卒業生 3 年間の評定平均と進路先

	大学		短大		専修各種学校		就職		その他	卒業数
	国公立	私立	国公立	私立	医・看	その他	民間	公務員		
4.1 ～	20 59%	42 24%	1	5 11%	11 32%	2 4%		1	6 17%	88
3.6 ～	8 24%	39 22%		12 27%	13 38%	9 19%		1	11 29%	93
3.2 ～	4 12%	62 35%		14 32%	6 18%	19 40%	1		7 18%	113
3.1 以下	2 6%	34 19%		13 30%	4 12%	17 36%	2		14 37%	86

(5) まとめ

先にあげた要素は、高校生活を通じて「伸びる資質」であると同時に、学校側が「伸ばしたい資質」でもある。ところが、最近の生徒は以前よりもこのような力が弱まっており、教育現場から様々な指摘もある。また、それとは別に低学年での学習実態の二極化の傾向は、入試環境の変化によって受験時期に入ってから、その進行に歯止めがかかりにくくなっている。さらに、さまざまな動機づけで意欲の高まる生徒とそうでない生徒との二極化も進んでいる。

「生徒の資質を伸ばす」の観点に立った時、必修単位がいっそう減少する新学習指導要領が実施されると、学ぶための行動目標を設定し、授業展開と自宅での学習との結合をより意図的なものにすることが求められるであろう。また、「教わる」から「参加する」授業スタイルへの転換も一層求められるだろう。これらの実施については、ある程度の強制力も必要であり、その前提として生徒自身の自己変革も不可欠である。

1.2 『大学で伸びる資質』

報告者 北海道教育大学札幌校
田中 昌弥

(1)「どのような資質をもった学生が入学後に伸びるのか」の理解

「資質」とは何なのだろうか。例えば、才能や基礎学力、学習意欲がそれにあたるのか、また大学での研究・学習に要請される総合力のようなものなのか明確な定義がない。したがって、資質のデータ化が難しい。一方、「伸びる」の規準とは何なのだろうか。例えば単位取得状況や平均得点、また就職試験の結果なのかやはり明確な定義がない。それぞれの大学・学部・研究室の目的との関係の中で判断されなければならないだろう。

(2) 大学で求められる資質とは何か

人文・社会・自然の各分野における、本学教員への聞き取り結果を以下にまとめて示す。

1. 各分野が共通して求める資質

知的好奇心

専攻する分野への強い興味とある程度の広い視野 / 自分の分野に限らず、「なぜ」と問いたがる意識 / 結果だけで満足せず過程を考えたい習性

集中力があり苦勞を厭わない

手間のかかる実験や調査、資料探索を面倒がらない / すぐには見えない世界を諦めずにわかろうとする / 課題に対して時間をかけて集中できる

主体性・自立性があり自分の考えをもつことができる

柔軟性・謙虚さ

自分の視点を対象化でき、他者から学ぶことができる / 人の話に耳を傾け、失敗経験や教員の指導から謙虚に学ぶことができる

コミュニケーション能力

自分の意見を説得力をもって他人に理解させられる / 自分の世界に閉じこもらずチームワークを組むことができる

思考力・論理性

現実と理論、理論と理論とを結び付けて思考できる / 論理的な文章を書くことができる

2. 分野ごとの要件

基礎学力の「低下」

・基礎的研究分野では、学生が自覚すれば大学で取り返すことは可能である。

・学際的研究分野では、不得意領域が複数にまたがり講義・演習の水準維持は困難な現状である。入学前の学習との関係

・生物、地学では、子ども時代の興味が大学の研究にリンクすることは可能である

「受験学力」より、実地体験など関心に応じた探究をしていたことが資質に直結する。

・数学・物理・化学では、高校までの意識からいくつかの点で転換が必要である

「問題を解く」から、単位など基礎の正確な理解や、過程・論理へのこだわりが重要である。「高校では優秀だった」というとらわれや甘えの意識から、視点を変える必要がある。

・人文・社会科学系では、高校までの意識から大きな転換が必要である。

「暗記」や「主観」を脱し、人間・社会への本当の関心や方法論の自覚が求められる。

・農学・工学・環境系では、高校までに身につけた様々な領域の基礎的素養が重要である。

さらにそれらを結び付けて運用できるかがポイントである。

(3) 学生の資質と大学教育

伸びる過程は、学生の個性や学生集団の質によって違う。学生一人一人の特性を判断し、研究室の人間関係も視野に入れた指導が必要である。上記の資質を入学時から見せている学生はごく少数だというのが現状であり、そこをどう育てるかが問題である。また、意外な学生がきっかけをつかんで資質を発現し、急速に伸びるという例も少なくない。多くの教員はどの学生も伸びる可能性があると見ている。特に面接・小論文入試によって入学してくる学生は、始めは苦勞しても後で伸びることが多いとの評価がある。いずれにしろ苦勞を厭わないほどの動機づけをどう持ち、どう持たせられるかが最大のポイントであろう。

討議 1

高校 高等教育の中で伸びる資質を考えると、基本的生活習慣や社会性が非常に重要である。高校ではこの二つについて非常に時間をかけて指導している。大学入学時の学生の基本的な社会性が、どのような状況にあるのか、また大学ではその重要性をどのように捉えているのか。

大学 基本的生活習慣が身につけている学生であることに越したことはない。自分が本当にここで起きて、きちんと大学の講義に行くということ、自分自身の実感として捉えているかが大きい。高校までは「とてもいい子」であっても、「大学で何を学ぶのか」という意識が希薄な学生は崩れてくる。大学教育の中で大事なことは、現実の中から学ぶことであり、教員があれこれ細かく生活指導をしようとしても言う通りには行かない。個人的には、ゼミ、旅行、学生の自主的な活動、教育実習といった4つの学生の活動を重視している。これらの体験によって、社会性獲得への軌道修正がされている。現実の中から主体的な規範として生活習慣を身につけるということが、特に大学の場合には重要ではないか。

高校 学習実態の二極化の一つの原因として、入試環境の変化があげられる。各大学の入試が易しくなる、いろいろな形の入試をやる、しかも期日が早い。高校の教育の現場に、入試の多様化による弊害を押しつけているのではないのか。

高校 生徒の進路指導をする上で、大学がどのような受験科目や入試内容を設定するかということは、指導上非常に大きな意味を持つ。さまざまな勉強をしていないと、対応できないような科目を課せられるケースもあり、入試の内容によって、現場での指導の温度差は結果的に大きくなっていった。特にこの何年間かは、それを実感をしている。

大学 私がこれまでに感じた必要な資質の中に、生命力というものがあったのです。言い換えれば、何か物事を行うために何を自分は今すべきかといった論理的な戦略的思考ができるということになる。このような資質は、今回は取り上げられていないのだが。

大学 戦略的思考までできるというのは、かなりの学生である。段取りや、今これをするために次

は何をやり、今は何をやらなければいけないということが考えられる。しかし、実際に高校から上がってきた学生たちの中で、その思考ができるものは限られており、大学教育の前提として期待するわけにはいかない現状だ。それは、むしろ大学の研究活動の過程で育てていくものである。また、一度社会に出てから入学してきた来学生は、その点が強いというのは実感である。

シンポジウム 2

『高校での教育・大学での教育』

2.1 「高校での教育」

報告者 北海道札幌啓成高等学校教諭
土岐 均

(1) 本校の概要

本校は、石狩管内で唯一普通科と理数科が併置されている学校であり、現在の生徒数は1,100名を超える大規模校である。平成9年度から2学期制を導入し、ゆとりを持った教育活動を実践している。普通科は、2年次から類型(文系・理系)に分かれ進路に応じた学習に取り組むことができるよう配慮されている。

本校に入学してくる生徒は、年度によって相違があるが、内申ランクが理数科でE、普通科でG程度である。進路は、85%以上の生徒が大学、短大、高等看護学校等を希望している。

(2) 学習への取り組みと効果

1. 朝読書について(1～2学年)

国語科の教師から担任会への提案で、毎朝SHR時に10分間読書をさせる。各自に読みたい本(漫画は禁止)を用意させ、当初は強制的に読ませ活字に触れさせる。感想文等は書かせない。

その結果、遅刻をする生徒が減り、落ち着いた雰囲気の中で授業に入ることができるようになった。当初は嫌がっていた生徒もいたが、本を読む習慣が身に付いた生徒もかなり増加した。

2. 朝テストの実施(1～3年)

1年次の後半から週に2度、英単語・古典単語のテストを実施している。点数については、それぞれの教

科の平常点に組み入れられ、採点は担任が行っている。その結果、単語力がついたと同時に受験の見えない力となった。

3. 英単語・漢字のコンクール実施

月1回、英単語は帰りのSHRで、漢字はLHRでそれぞれ実施する。英単語は、朝テストの総まとめとして、漢字は年間の試験範囲を提示して実施している。

評価は、朝テストと同様にそれぞれの教科に平常点として組み入れている。その結果、少しずつではあるが、基礎力が身に付いた。また、漢字コンクールでは、年度末に優秀者を表彰している。

4. 進路意識の高揚

学年毎に、進路別ガイダンス(3年間で4回)や進路調査を実施している。また、個人面談(年間4回～5回)を実施したり、学年ごとに進路ファイルを活用している。特に、2年次の後半から早期に進路目標を明確にさせ、個人面談を通して進路実現するための具体的な学習面での目標を設定させることが大切である。例え無理な目標であっても、それを教師側が否定せず、生徒に努力させることが重要である。

(3) 今後の課題

本校の教育課程上、文系の国公立大学を受験することが難しい面がある。今後新カリキュラムを作成する上で3類型(私大文系・国公立文系・国公立理系)を視野に入れた編成も考えている。

2.2 GPAの導入と今後の大学教育の展望

報告者 札幌国際大学
奥平 忠志

(1) GPAの導入のねらい

近年大学生の学力低下と無目的入学の学生増加が問題とされ、その問題解決のため多くの大学で様々な取り組みがなされている。本学でも入学生の学力の低下と無気力さにどのように対応すべきかが論じられているが、未だよい解決策が見いだされていない状況にある。

本学では、数年前から人文・社会学部のカリキュラムの中に1年次必修科目として教養演習を設け、少人数によるリテラシー教育を試み、一定の成果が得られている。新設の観光学部でも同様に、1年次の学生に対して教養演習を課している。観光学部では、観光に対する理解を深めるとともにリテラシー教育を徹底させている。前期には共通の教科書「トーマス・クックの旅」(講談社現代新書)を用い、アブストラクトの作成、発表に重点を置いた演習を行っている。入学当初の学生の大半は、3無(読めない・書けない・話せない)の学生であった。担当の教員から、どうしたらよいのか分からないとのぼやきが聞こえてくるほど、日本語リテラシーの能力不足は深刻である。前期を過ぎてからは進歩したとの声が多く聞かれるようになった。本来ならば、中学校段階ですでにマスターすべき内容である。どこに原因があるのか、根本的な日本の教育の見直しがなくてはこの問題は解決できない。

このGPA(Grade Point Average)は、学生の無気力さ(学習への取り組みの消極性)を解消し、主体的な学習への取り組みへと転換する支援策として考えられた。

(2) GPAの概要

GPAは表2に基づき、以下の通りに計算する。

例えば、履修科目7科目で次のような成績であった

表2. 履修した科目の評価(GP)定期試験の結果によるポイント

試験得点	定期試験評価	再試験評価	成績評価	Grade Point
100-80	優	合格	優	4
79-65	良	合格	良	3
64-55	可	合格	可	2
54-40	再試験	合格	合格	1
	"	不合格	不合格	0
0-39	不可		不可	0
失格			失格	0

とする。

- A 科目優・2 単位・GP 8 ,
- B 科目優・2 単位・GP 8 ,
- C 科目良・2 単位・GP 6 ,
- D 科目可・2 単位・GP 4 ,
- E 科目再試験合格・2 単位・GP 2 ,
- F 科目不可・2 単位・GP 0 ,
- G 科目失格・2 単位・GP 0

$$\begin{aligned} \text{GPA} &= \{ (2 \times 4) + (2 \times 4) + (2 \times 3) + (2 \times 2) \\ &\quad + (2 \times 1) + (2 \times 0) + (2 \times 0) \} \\ &\quad / \{ 2 (\text{単位}) \times 7 (\text{科目}) \} \\ &= 28 / 14 = 2.0 \text{ Point} \end{aligned}$$

(3) GPA と履修指導 (表3)

1. GPA の特に優れた者には以下の特典が与えられる。(但し, 16 単位以上登録したものに限る)
 - ・次年度オリエンテーションでの学長表彰
 - ・奨学生等の選考での優遇
 - ・交換留学生の選考での優遇
 - ・各種研修旅行参加での優遇
2. GPA の得点が3.0ポイント以上の場合(但し, 16 単位以上登録したものに限る)

次の学期での履修単位数の上限が緩和される。
3. GPA の得点が2.0ポイント未満の場合

次の学期での履修に制限が加えられる。

 - ・履修登録単位数を 16 単位までに制限

- ・他学部科目の履修制限,
- ・キャリア科目および資格科目の履修制限
- ・指定された補習クラスの受講
- ・交換留学および研修旅行参加の制限

4. GPA が2学期連続して2.0ポイント未満の場合退学の勧告を受ける。

討議 2

司会 91 年の大学教育の大綱化で教養課程に対する縛りがなくなり, 自由にカリキュラムを組めるようになった。シンポジウム1でも指摘されたリテラシー教育, 特に日本語のリテラシーを育成するために, 多くの大学では大体10名から20名ぐらいの少人数教育, あるいは問題解決型の教育を導入している。これらのねらいは, 職業意識や目的意識を早い段階から持たせようというものである。

司会 平成15年度からの新教育課程に向けて各高校と準備が進められている。その特徴の一つは「総合的な学習」である。その目的は, 「自ら課題を見つけ自ら学び, 自ら考え主体的に判断し, よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」, 「学び方やものの考え方を身に付け, 問題の解決や探求活動に主体的, 創造的に取り組む態度を

表3. GPA による指導の一覧

成績優秀者	次年度オリエンテーションでの表彰 奨学金の選考での優遇 交換留学・研修旅行参加での優遇
GPA 3.6	半期登録単位数上限を 28 単位
GPA 3.0	半期登録単位数上限を 24 単位 登録単位数制限 16 単位
成績不振者	補習指導 キャリア科目・資格科目の履修制限
GPA < 2.0	他学部科目の履修制限 交換留学・研修旅行参加の制限
退学勧告	2 期連続して GPA<2.0
制限の解除	該当学期の GPA 2.0

育て、自己のあり方、生き方を考えていく」といった、このシンポジウムとも絡む内容になっている。では、どのような形で「総合的な学習」に取り組んでいくかということは、実際の現場にいる者にとって大変難しい問題となっている。

高校 学生の学力低下に伴い、「入試科目を昔に戻せ」という議論は、極めて安易である。リテラシー教育は高校でも進めている。今後、さらに学力の低下した生徒が入学してくると予想される。これからの大学教育の基本は、リテラシー教育になるのではないか。果たして、教養演習が専門教科の学習に対して具体的な効果があるか疑問である。また、リテラシー能力の不足について、高校側にどのような問題点があるのか。

大学 例えば、リテラシー教育のため、普通有能力だったら3日あれば読める単行本を、読み、書き、話すという観点から3ヶ月かけて読ませる。最初は声を出して読ませ、そこに何が書いてあるのかをまとめさせ、発表させる。それを繰り返すうちに、徐々にまとめ方もうまくなる。もちろん、1年間だけではこのリテラシー教育は完結しない。これは、高校だけの責任ではなく日本の小学校からの教育、あるいは小学校の先生をつくるための大学の教育がどこかおかしいのではないか。基本的に家庭教育の問題を含めて、日本の教育を考え直す時期にあるのではないか。特に、「ちゃんと目的を持って大学へ行くのだ」という進路指導を高校にはしていただきたい。「偏差値がこれだからこの大学は無理だからこちらに行きなさい」という指導はぜひ止めていただきたい。

大学 5教科7科目を展開せざるを得なくなったというのは、基礎学力の不足、リテラシー教育の実施が背景になっている。大学では、専門性の高い教育を受け学んでいるところである。それでなければ日本の将来はない。リテラシー教育は義務教育で終わるべきであって、高等学校ではさらにそれを成長させた形で行うべきである。大学で

何故リテラシー教育なのか、あるいは補習授業をして高等学校の焼き直しを大学の先生方が1、2年かけてしなければならないのか。それは、大学の先生方が本来背負うべき任務を逸脱してしまう可能性がある。負担が非常に大きくて、研究教育がないがしろになっていく面もある。

高校 高校側が5教科7科目をやりたくないというのではない。たくさんを知って大学に進学させた方が絶対に良いことは間違いない。しかし、土曜日が全部なくなり、「総合的な学習」の時間が入ってきて、どこでどう教科の時間を確保すれば良いのだろうか。さらに、中学校から入学してくる生徒たちの学習量が3割減っている。文部省が主張することと大学側が要求していることとの矛盾が最大に詰まっているところが高校である。

高校 小学校からの教育が問題であり、改善しようとすれば当然そちらから進めないと、高校、大学のところだけ問題としても間に合うはずはない。小学校で分数を教えるとき、円周率を3とするということは、要するに分数を教えないということだ。分数を教えないということとは、逆に整数もわからないということだ。易しいことを理解させるためには、ある程度難しいこともやらないと分からない側面もあるはずだ。

大学 大学側は、国立大学協会をはじめ、経団連、日経連等の現在社会に関わっている方々の文教部門と連携し、意見交換をしている。また、大学審議会のメンバーや、全国高校長協会の方々とともに、入試あるいは入試の改善が目指すものを21世紀に向けてどうするかという話をしている。ただ、文部省が打ち上げたものを、大学協会が勝手なことを言っているわけではないことをご理解いただきたい。

終わりに

本年度のガイダンスセミナーは北海道大学学術交流会館において、2000年9月20日の午後1時から午後4時まで行われた。セミナーでは、「伸びる資質」「伸ばす教育」をテーマに2つのシンポジウムが行われ、高等学校と大学の教育現場から活発な意見交換が行われた。

シンポジウム1では、高等学校で伸びる資質、大学で伸びる資質についての報告があった。その後の議論と合わせ、以下のことが明らかになった。

- 1 高等学校や大学で「伸びる資質」の要素に、基本的な生活習慣と社会性がある。
- 2 資質を伸ばす上で重要なことは、学生個々の特性をいかに判断し指導するか、またきっかけをいかに与えるかである。

シンポジウム2では、シンポジウム1を受けて、資質を伸ばすためにどのような教育が行われているか、特徴的な取り組みを行っている高等学校や大学から実践事例の報告があった。その後の議論と合わせ、以下のことが明らかになった。

- 1 日本の大学生は、初等教育でマスターすべき様々なリテラシー能力が大変不足している。
- 2 高等学校では、小テストやコンクールを、大学では履修した科目の評価（GPA）を導入するなど、それぞれ学生の学習意欲を高める様々な試

みがなされている。

- 3 高等学校の教育現場では、文部省の示す学習指導要領と大学側が求める学生像といった2つの圧力がかかっている。

伸びる資質とは何か、それをどのような観点で捉えて教育していくかといった議論は、高等学校と大学との間ではほとんど進められていなかった。難しいテーマではあったが、本シンポジウムでの報告や議論の中で、基本的な生活習慣や社会性、知的好奇心や論理的思考といったより分析的で具体的な観点が示されたことは注目される。今後、高等学校と大学間の議論を重ね、「どのような資質を伸ばさなければならぬか」といった具体的な分析が必要である。また、今後道内の様々な実践事例を集積しながら、「資質を伸ばすにはどのような教育が必要か」といった方略の議論も質と量の両面で必要となるであろう。それらの取り組みによって、教育現場での評価観を変えることもできるはずである。

今後の議論の継続と発展を期待したい。